

Title	R・ ハイルブローナー著 浜田清夫訳 一〇〇万人の経済学
Sub Title	
Author	松浦, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.11 (1964. 11) ,p.938(82)- 940(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19641101-0083
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19641101-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

四つに分けている。

第一期（一九四五—四七年）は主として戦後処理の時期であり、反共産主義グループの弱い所ほど早く共産党権が樹立されていた。「ところがいざ権力が固まってくるにつれて、共産主義建設の仕事は複雑である。個々の特殊状況に対する具体的で明快なイデオロギーの指針がない。人間の創意工夫が広範なイデオロギーの枠を補っていかねばならないということがだんだん分ってきた」。この時期を「多様な制度とイデオロギー」とよぶ。

第二期（一九四七—五三年）は、共産党の指導的役割を重視するにつれ、ソ連体制のもつイデオロギーの意味が強調されるようになった。かくてスターリン主義が暴れまわる「制度とイデオロギーの画一化」の時代であった。

第三期（一九五三—五六年）は、スターリン死後、その経済政策の失敗と権力の苛酷さが、スターリン批判をよびおこし、その結果、党権力の強さの度合により各国に大小の反応をよびおこした。「制度とイデオロギーの多様性」である。

第四期（一九五七—五九年）は、「スター

リン主義の神話をうち破ろうとするフルンチヨフの政策は、共産主義陣営内にさまざまな不安をよび起した。それはソ連がハンガリア暴動を弾圧する決意を示したことによって、いくらかは解消された。「ソ連の指導者もつとありふれていて、しかもそれほど間に合わせではない治療薬、すなわち経済的紐帯をつよめ、政治制度上の結びつきを再建するのに大童であった」。かくてこの時期は「多様な制度と画一的なイデオロギー」ということになる。

著者ブジェンスキーは、若冠三十六歳の少壮ソ連研究家だが、ハーバード大学ロシア研究所でもその研究は高く評価され、ケネディ・ブレインの一人として、アメリカの対ソ政策は彼の答申による所が多いとされている。本書の一つの特色は、一般に民族主義と共産主義の差異と考えられている、共産圏の分裂と統一とを、共産党権力とイデオロギーとのからみあいであつかまえていることである。第二の特色は、戦後各国共産主義の歴史を一望にまとめたその努力と功績である。従来この時代のまとめた分析がなかっただけに貴重なるものであり、将来の展望の基礎とな

八二（九三八）

ろう。（弘文堂・昭和三十九年七月刊・B6・五〇三頁・一二〇〇円）

—加藤 寛—

R・ハイルブローナー著
浜田清夫訳

『一〇〇万人の経済学』

この書は、原書名を「The Worldly Philosopher——俗界の哲学者たち——」といい、経済学者とは、これまで、哲学の図式のなかに、あらゆる人間活動のうちで最も世俗的なもの——人間の富に対する衝動——を組み入れようとつとめてきた人々であり、この努力の歴史こそ経済思想の歴史であるという考え方に、もつづいて、経済学を形成し、発展させてきた偉大な経済思想家たちの生涯と時代、そしてその関連のもとに彼らの思想を見事に浮き彫りし、魅力ある筆致で描写している。

この書は、一九五三年に出版され、米国でベストセラーとなり、学生は勿論、ビジネスマンにまで愛読された経済書であり、しかもこの通俗性が、この書のもつ学問的な水準を

少しも損っていない点で、他に類のない書である。このことは、米国においてハーヴァードをはじめ、多くの大学が、この書を初級用の経済学史教科書に採用していることでもわかるであろう。

まず、この書は、人類が俗界的な富の集積を重んずる社会に転換した・中世から近世にいたる混乱期を描く。この時期は「経済革命」と呼ばれる時代であり、富のために、自利心を満足させるために、人間が合理的に行動する時代への移行過程である。そしてこの革命のなかで、形成された俗界の秩序に、指導的な哲理をあたえた思想家としてスミスがとりあげられる。

しかし、スミスによってリードされた素晴しく発展する・この世界は、次の世代のマルサスとリカルドには悲観的にみえはじめる。すなわち、「経済革命」の限界、そしてその否定的な要因に、彼らが気がつきはじめた。だが、彼らはこのような態度をとりながらも、まだ、理性、秩序および発展に強い信頼をおき、その立場から社会の変化をみつめようとする。

つぎの世代に、この革命がもたらした経済

法則の美名のもとで残酷さが合理化される現実から眼をそむけ、空想の美しい世界を夢みる夢想家たちの時代がくる。しかし、この苛酷な現実を直視し、悲惨から人類を救う可能性を信じ、しかも制度の必然的な変革を通して、現在ある制度を無情に否定することがその唯一の道であると信ずる偉大な経済思想家があらわれた。マルクスである。

マルクスの「死の宣告」にもかかわらず、この制度は死滅しなかった。それどころではなく、ヴィクトリア朝の好況が、英国に訪れ、むしろ進歩と楽観主義が人々にひろまってきた。そこでは、エッヂワース思想に極端にみられるような・人間が快楽的機械であるという仮定にもとづく、単純化された抽象の世界に現実をおきかえ、すなわち、心理的な快樂加算機の調整如何で、一種の経済的天国が生れるという哲理がうみだされた。しかし、この公式世界に自己満足している経済学専門家たちに対して、下界では悲しい現実を指摘するアマチュアたち——ホブソンやヘンリー・ジョージ——が生きていたのが、この時代の特徴であった。彼らは、学界では、異端者扱いにされ、その価値を認められなかった

が、俗界の哲理にあたえた影響は大きかった。

この時代に、経済思想は新しい土地で発展する。それは野蛮で未開な新大陸である。なにごとにも懐疑的なヴェブレンは、古い哲理をことごとく疑い、新しい土地に生じた富の制度を納得いくまで追求する。ここでは、現実の人間は、合理的であるよりは、動物的本能にもとづく不合理な行動をとるものであり、このような仮定で、富の哲理を分析しようとする。

ヴィクトリア朝の好況が終ったとき、古い世界でも、新しい世界でも、一つの病理的現象が発生した。失業である。この病める世界に良い処方箋をあたえたのがケインズであった。そして今日の世界でも、これまで人類がつづけてきたと同じように、俗界の富の諸問題に悩み、そこから哲理を導き出そうという試みがつづいているのである。

著者の立場は、米国において伝統的な制度学派の立場である。著者はミッチェルの「Lecture Notes on Types of Economic Theory」の制度学派の学史的な分析を基調にしているといえよう。現在、制度学派のな思考は、

経済学において正統な立場におかれていないことは事実である。経済学が科学であり、論理性を重んじる以上、これは当然であろう。しかし、反面、経済思想が常に歴史・社会の非合理的な諸要因から影響されていることを考えるならば、制度学派的な思考がたえず論理的な正統派の対立者として存在することもまた事実であろう。この意味で、この書を読み、富に関する制度と経済学の関連を、学史的に理解しておくことは有益であろう。(原書房、A5・本文四二三頁・六〇〇円)

―松浦 保―

白井 厚 著

『ウィリアム・

ゴドウィン研究』

我が国における英国の近代思想の研究が本格的に開始されたのは戦後のことである。現在まで、市民革命を中心とした社会・経済史的研究を背景とした多くの思想史研究の成果が世に問われ、それはわが経済学史学界の一大潮流を形成するに至っている。思想史研究それ自体はわが国においては戦後盛んになっ

た学問であるが、最近欧米での *History of Ideas* という研究領域がもつ重要性が確認されつつある時期でもあり、わが国思想史研究の国際的意義も益々強まっているものといえよう。こうしたときに、白井厚氏の多年に渉る研究の成果が世に問われたことの意義は大きい。

ウィリアム・ゴドウィンの名は、わが国ではすでに戦前から紹介されており、主著『政治的正義』の翻訳も行われている。しかし、その本格的な研究は戦後にはじめられた。社会思想といっても、あらゆる思想領域を覆うものとして考えるなら、ある個人をとりあげることは、その人物の一面、乃至は思想の一面が――しばしば本質的側面と称されて――とりあげられることになりかねない。過去において思想史のこうした素朴な方法は支配的であったし、それはそれとしての役割も果たしていた。しかし社会経済史学が急速に発展している現在においては、かかる把握の仕方は許され難い。著者は、このような傾向を十分認識され、できる限り正確な思想家ゴドウィン像をうちたてようと努力されている。ゴドウィンの内的思考の展開と、その外的拡張

を軸に描かれる評伝にその点は明白にうかがえるところである。しかも、時代精神の潮流というゴドウィンの現実的基盤を重要視されている点、本書の第三章の分析等々からそのことは一層あきらかところである。本書がこの第三章を有していることは思想史の方法の深化という点からも意義深いのではなからうか。

ゴドウィンの思想活動は、哲学・経済学・文学・教育学等の多方面にわたり、夫人マリ・ウォルストンクラフトとともに社会運動家であり、本書はそれら彼の多方面の活動を可能なかぎり吸収している。著者は、このような作業の前提として、詳細な文献考証と時代考証を行っており、巻頭の年表・家系図、巻末の文献目録等は、今後この分野の研究者にとって大いに役立つものとなるであろう。今日、国家独占資本主義あるいは、社会主義から共産主義へとという過渡的時代にあつては、現実の人間のあり方に厳しく、そこから完全なる発展を志向したゴドウィンの精神は更めて確認される必要を有しているといえよう。(未来社・一九六四年八月刊・A5・三四二五五頁・二二〇〇円)―飯田 裕康―